

現代青年の老人理解へ教育的冒険

—— 平成 7 年度授業、人間関係各論「人間と発達」の

自己点検と評価をかねて ——

河 合 優 年 (三重大学医療技術短期大学部教授)
津 村 俊 充 (南山短期大学教授)

1. はじめに

今日ほど人間のあり方そのものに関心もたれている時代はない。現代人は高度な近代文明の完成を目指す過程の中で「人のこころ」を置き去りにしてきたことに気づきはじめている。このような気づきは、ここ数年の子どものいじめや自殺などに関係した事件の続発によって起こってきていたのであるが、今年になって生じたさまざまな社会的事件はそれを加速するような形で私たちに「人間とは何か」「人間の尊厳とは何か」を問いかけてきている。人間とは何なのか、死すべき存在としての人間が、その一生の中で何を得、何を失っていくのか真剣に取り組む必要が出てきているのである。

ここで報告する実践レポートは、人間関係各論「人間と発達」の授業において扱われた問題を整理したものである。この授業は、人間の誕生から死までの過程を胎児期、乳児期、幼児期、児童期、青年期、壮年（成人）期、老年期という発達段階に区切り各々の段階で生じてくる問題を題材として、「人間とは何か」「変化とは何か」という問いにこたえようとするものである。

青年期にある学生が、他者の視点に立つことは、知的には可能である。しかし、そこで自己をふりかえりながら他者の立場になり、自分が無意識的にもっている人間観に行き着くことは必ずしも容易なことではない。自分と異なる存在である他者を、いかに共感的に理解できるようになるのが大きな課題となるのである。本年は、老人を理解するというテーマのもと、学生たちが老人をどのように理解しているのか、またそのような認識は変容できるのかについて検討を加えてみた。

2. 授業の構造と目的

この授業は、本年から開講されたものである。授業の目的は、人間が時間とともに変化してゆくという避けられない現象を、そのメカニズムを学問として理解するだけでなく、自分との直接的な接点の中で理解していこうとするところにある。今回のテーマは老人であるが、外界からみられる老人の姿、書物などから提供されるデータとしての老人像に対して学生はどのようなイメージを持っているのか、またどのようなかかわりをしようとしているのかを契機として、老人との人間関係のあり方に検討を加えてみることにする。

授業は、次のような組立てで進められた。1)学生の老人観、2)発達についての知識の確認、3)老人の行動特徴の理解、4)老人との人間関係のあり方についての自分の考えの意識化、5)実際経験としての老人、6)老化についてのまとめ。

3. 若者の老人観

私たちは、「人が誕生した瞬間から死に向かって一方通行的に変化してゆく存在である」という事実をあまり意識していない。このことは、これから自分たちが歩いて行く道をあまり気にしていないということともつながっている。例えば、近年の都市計画では、急角度の歩道橋や地下鉄への階段などが多く作られているが、今のところそれらを不自由なく利用している現代の壮年が、将来にわたって不自由なく利用できるという前提のもとで考えられているように思われてしかたない。今や街はけって「やさしく」ないように思われる。

老化は避けることのできない現象である。ただ、それは「今」の自分には関係のないことであり、「その時がくれば考えればよい問題」である、と考えることはそれほど奇異なことではない。実際問題として、老化を実感するのは数十年あとの事であるからである。しかし、人間関係のあり方として考えるとそれは必ずしも望ましいあり方でないことは明確である。なぜなら、青年も社会の一員としてそれ以外の構成員とコミュニケーションし、相互に支えあわなければならない存在であるからである。老人を理解することは、すなわち「人間関係」を円滑にする重要な要因であるといえる。

老人とはどのような存在なのか、老化とはどのような現象なのかを知ることは単に個人の問題だけでなく、人間社会にとっても重要なことなのである。では現代の女子学生は老人をどのように見ているのであろうか。授業を受けている29名の学生に、老人から連想される言葉や行動などをあげてもらい、それを疑似KJ法によってグルーピングしたものが図1に示されている。

カテゴリーとしては、身体的な特徴（しみ、しわ、髪が少ない、白髪、入れ歯、視力の低下、老眼・老眼鏡など）、性格的特徴（おおらか、頑固、偏屈、寂しがり屋、わがまま、喜怒哀楽が激しいなど）、行動特徴に関するもの（トイレが近くなる、ぼける、物忘れがひどい、記憶力が低下する、お風呂が長いなど）、老人の服装など物質的な物（くすんだ服の色、手提げ袋、乳母車、杖、和室、こたつ）などが抽出されている。グループ内の評価を見てみると、図からも見られるように、全体的にネガティブな項目が多く見られている。また、少数ではあるが、死や介護など社会的な支援に関するものも上げられている。

同時に、実際に老人に聞き取りを行った彼らの老化に関する不安・問題意識を見てみると、老人の心のケアで本当に大切な事は何か、老人と家族がいかにかうまく同居するか、これから老人が増える一方だが、老人たちの生活は大丈夫なのか、老人はボケ始めたことに気づいているのか（記憶がなくなっていくのが解るのか）、寝たきりになったときなどの介護について（家族の中で介護していくか、病院・施設に入るか、それぞれの良い点悪い点）など、福祉介護など関わりに関心のあることが示されている。ただ、これらも全体としてネガティブなものも多く、老人になってからの生き方、楽しみ方に言及したものはごく僅かであった。また、死の受容などに言及したものもみられた。

このような劣化としての老化の捉え方はごく一般的であるといえるが、これがそのまま老人のマイナスイメージとして定着することについては問題がある。つまり、機能や精神機能の劣化だけが強調され、老人は社会のお荷物として認識される可能性があるのである。このような老人観の定着は、若者の老人への理解を妨げるだけでなく、老人自身にとっても受身的・加害者の意識をもたせることになる。

このような問題に対してどのような対応を取るのかは、これからの人間関係を見定める上でも重要なポイントとなる。老化は避けることができない現象であり、だれにもやがて訪れるものであることを認識し、老人固有の思考や行動特徴の理由を理解し、現在の自分との連続性を認識させるためにはどのような方法があるのであろうか。この授業では、老化の意味を考えさせた後、さらに自己の老人観を意識させ、老人の疑似体験をさせることによりこれらの意識がどのように変化するのが検討された。

4. 人が発達すること

私たちは発達するという言葉を何気なく使っているが、あらためて発達の意味を聞かれると、どれくらいの人がそれに答えられるであろうか。もちろん、答が正しいかどうかに関係なく人は発達しているのも事実である。しかし、もしその発達の考え方がなんらかの思い込みを人に与えるとしたら、それは正し

く理解するにこしたことはないと言えるのではないだろうか。

心理学の世界においてこれまで多く用いられていた発達の枠組みは、「ある出発点から目的（ゴール）までの変化の過程」であった。この場合の出発点は、通常誕生の時点であり、ゴールは完成された姿、つまり大人の姿が到達点とされてきた。したがって、無力な赤ん坊が有能な人間になるまでの変化と考えられてきたのである。そして、大人になった子どもは、その後は諸機能を劣化させ、老化してゆくことになる。そこには、発達もっている上昇的なびきはなく、下降してゆく姿だけが強調されることになる。このような意味では、発達の中に老人の姿を見ることはできなかったのである。

しかし今日の考え方では、人の一生涯が発達である、つまり老人になってゆくまでが発達であるとするのが一般的となっている。先に述べたように、私たちは時間軸に沿った一方向的な変化をしているのであるが、それは自分自身を外界に合わせるように変えていく適応的な変化の過程であると捉えられている。

つまり、刻々と変化する環境と、同じく変化する自己の心身を調節しながら、うまく生きることこそが発達なのである。記憶力の低下を、手帳などを使って補ったり、聴力の低下を補聴器で補うのは、自己と環境との再調整という意味では立派な発達の行動なのである。

このような視点に立つと、大人の姿で完了するとされた発達は、まさに死のその瞬間まで続くことになるのである。老化イコール劣化とするこれまでの考え方は、知らない内に私たちに老人は劣った存在であるとする老人観を形成していたのかもしれない。しかし一方では、老化にともなっては機能の低下が生じることも事実である。ただ、これらが即ちマイナスであると考えのではなく、老年期の特徴であり、それに対してなんらかの適応行動がとられていると考えることが大切となる。問題は、そのような変化がごく普通であるということを知ることなのである。青年と老人の非連続性のみが強調され、異種の存在として老人をみさせないことが必要なのである。

では、老人の特徴とはどのようなものなのであろうか。

5. 老化するということについて

老化は生きている限りいつかは経験することであるが、それが一般的なことでありと理解せず、あたかもその個人に固有なことであるかのように受け取られることが多い。誤解をさけるために、もう少しつけ加えるとすると、老化にともなう種々の変化が、その個人の人格と直接結び付けられてしまうことが多いのではないだろうかという点に問題があると考えるのである。だれもが平等にそのような問題を抱えるのであるという認識は、うちの「この年寄り」はこの認識を取り除いてくれることになる。

老化にともなってどのような変化が生じてくるのであろうか。ここでは、身体的特徴、社会的特徴、心理的特徴の3側面からとらえた行動特徴を簡単に記しておくことにする。

1)身体的特徴：個人差が大きいですが、一般的に次のようなことがいえる。筋肉や骨格、視力・聴力などの感覚器など種々の器官の劣化が顕著になる。また、これらによって引き起こされる疲労が激しくなってくる。また、脳の萎縮や組織の機能不全が始まり、健康の維持が困難になる。

2)社会的特徴：加齢にともない社会的な関係も急激に変化しはじめる。これらは、社会的な権威や影響力の低下やネットワークの減少として現れてくる。また、家庭内でも父母から祖父母へと地位が変化したり、老朽化した家屋の解体と新築などに代表される物理的世代交代などが生じる。このような意味からすると老年期は、死別や独居など、喪失の時代ともいえるのである。このような社会的変化に抵抗を示すと老害として迷惑がられることになる。

3)心理的特徴：老化に伴う変化として最も顕著なのが心理的側面である。知的な側面では、記憶力の低下、情報の処理能力の低下などが目だち始めることになる。また、感情・情緒面でも猜疑心や嫉妬心が強くなり、感情の抑制力が減退してくる。これらにともない自己中心的な性格や情緒の不安定感が目だちてくることになる。これらの現れ方には個人差が大きいですが、否定的な情動反応を繰り返すことによって自家中毒症状を呈することもであるとされている。

あらためて言うが、問題はこれらの変化が、個人の過去の結果として生じた物ではなく、加齢にともなった一般的な現象として生じている点である。あたかも特定の老人がここであげたような、いわば問題行動を起こすのではないのである。私たちは、問題行動をその当事者に原因帰属させようとする。そこに行き違いが生じるのである。本授業の受講生はこれらの点を学んだ後に、さらに自分たちの老人に対する考え方を意識化するために、結婚に伴って生じると考えられる、人間関係について議論する機会が与えられた。

6. 両親との同居と老人観

老人問題は先の問題であると考えている学生でも、結婚とそれに伴う親との同居という点になると、具体性が高くなり、自分の本音と向かい合うことになる。親との同居についてどのように考えるのかについては多くの意見が述べられている。もちろん、同居する相手も主人の親と自分の親とでは考え方は違ってくることになるが、ここではそれらの代表的なものを取り上げて述べておくことにする。学生がすでにかんりのリアリティをもって同居に対する意識をもっていることに驚かされる。

相手の親か自分の親かに関係なく、同居について肯定派の意見はそれほど多くない。肯定する学生でも次のようななんらかの条件つきであることが多い。

「私は同居には特に嫌な感じはもっていない。夫が同居してくれと言えただぶんするだろうと思う。しかし、同居するということはお互いに“譲歩する”ことが前提条件になると思うから、自分勝手な親、干渉しすぎる親とは共に暮らせない。これが血がつながっている肉親ならば許せる範囲ではあると思うが、血がつながっていないという目で見てしまっていると、我慢の限界があるだろう。自分が嫁として義親と同居するのにはいとわれないが、自分が姑として一緒に暮らすのは嫌だと思う。何だか気を使いすぎそうだし、一人の方が気が楽だと考える。」「結婚したら老人問題は避けては通れないことだと思う。愛する人と一緒にになりたいと思ってする結婚であれば、それくらいの問題は必須。だから、一緒に住むことになればその時は受け入れる。とはいえ、やはりいるよりいない方がいい。また、自分の両親とであればいいが、相手の両親だと果たしてやっていけるかどうかといった不安がある。理由としては、別居だと夫婦二人の自由な生活が過ごせるが、親がいることで二人のリズムが崩れる、気疲れする、相手の親に気に入ってもらえるかどうか、仲良くなれるか、うまくやっていけるか不安。」、などの意見がみられる。

一方、回答の大多数を占める同居反対派は、「同居に関しては、結婚してすぐ相手の親と住むとなった時、相手の親が元気でやはり嫁姑問題のいざこざがありそうだし、なるべく干渉されたくないという気持ちが強いので、一緒に住みたくないと思う。」「夫の両親は、他人だけど好きな人の親だから同居してうまくやりたいというのが理想。でも、やっぱり所詮他人なのでギクシャクして疲れるし、心の自由がなくなるように思うので、別居したいなというのが本音。」などのように、予想される人間関係の摩擦をその第一の理由にあげている。これ以外の理由としては、生活時間の違いや、食事の味付けなど、普段の生活上での問題を指摘しているものがほとんどであった。

自分の親との同居についても否定的な意見が多かったが、「今まで育ててくれたという思いがあるので同居できる。ただ、自分の親と同居するのはあまり違和感がないと思うけど、彼の方が辛い思いをするのではないかと思うと複雑である。あと、まだ性格が合う合わないの程度ならいいけれど、世話をする問題が入ってきたら本当に大変なことになりそうである。」などとその調子はやや弱くなる。ただ、生活のリズムなどについての不安は同じように指摘されていた。また、自分の母親と祖父母との関係から同居についてネガティブな印象をもっている学生も僅かではあるがみられた。このことは、老人観や家族観が家族のあり方を媒介として次の世代につないでいることを示唆しているのかもしれない。

両親の老化が直ちに同居につながるわけではないが、病気や老後については必ずしも拒否的ではないようである。「親が倒れたら一緒に住むかもしれない

が、倒れてからではつまらないと思う。やはり年をとったら同居の方が安心かもしれない。」「寝たきりになる前に、一緒にショッピングしたりお話をしたり、親が楽しんでくれることならしてあげたいと思う。」「お年寄りが病気で倒れてしまったら、それが夫の両親でも自分の両親でも、どちらの面倒もきちんと見てあげたいと思う。」などの意見がみられている。もちろんマイナスの意見もあり、「介護するということに対して少し抵抗がある。祖父が倒れた時数カ月家でみたけれど、負担が大きくて結局完全に病院側が見てくれる老人病院に入院させてしまったことを聞いたり見たりしていたし、辛いとすぐ投げ出してしまう性格の私に介護がやれるのかなという不安も少しある。」などの意見も述べられている。

ここでこのような同居についての意識を学生に聞いたのは、私たちが無意識のうちにもっている家族や結婚、そして老後についての考え方を意識化するためのものであった。結果の予想を格別していたわけではないが、全体にネガティブなものであったことは見てきた通りであった。

これまで見てきたように、老人や同居からイメージされる印象は総じてネガティブなものであった。このような印象は、当事者が対象を抽象的に把握し、間接的な経験と情報によっていることから形成されているのではないかと思われるのである。老人に対する意識の変革は、どのようにすれば形成できるのだろうか。

7. 老人を体験する

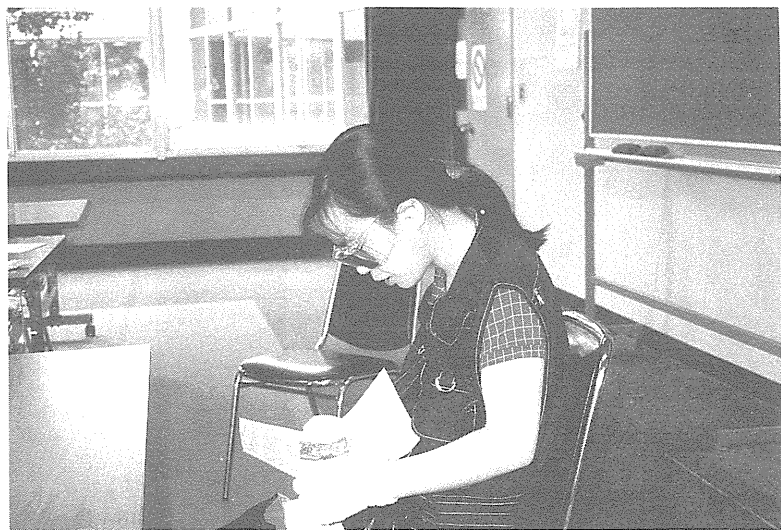
青年期の学生が今すぐ実際に老人になることはできない。従って、老人がどのような世界に生きているのかは、やはり間接的に推量するしかないのである。これまでの老化に関するイメージはネガティブであったが、本当は自分の経験に基づいたものではなかったのである。老人の世界を共有する試みは、青年期の学生にとっては自己の意識を変革するよい契機になるかもしれない。

ここでは、このような試みとして長寿社会文化協会が提供している「うらしま太郎」という老人シミュレーション装具を用いて、老人の感覚と運動の世界を疑似体験することとした。他者の立場に立つということの意味が実体験と結びつくことにより、これまでの意識がどのように変化するのが検討の中心となった。

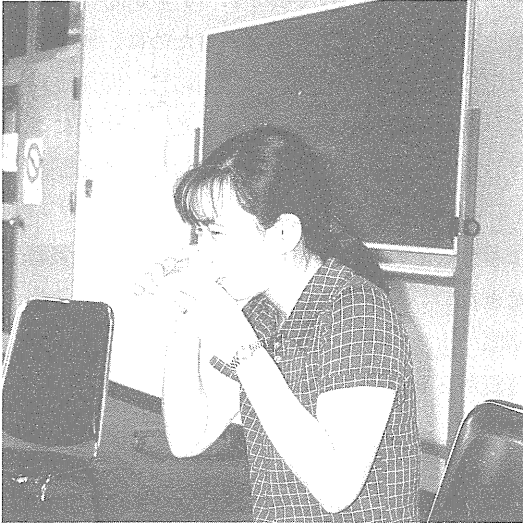
ここで利用した装具は、機能の低下がみられる諸器官のシミュレーションを行うものである。以下にその特徴を示しておく。老人の聴覚機能としては、JIS第一種型耳栓を用い高音域を聞こえにくくしている。視覚機能は、老眼（高齢者の調節能力の劣化）、白内障による色覚変化とぼやけて見える状態、視

野の薄暗さが再現されている。前屈姿勢にするために荷重チョッキ（1 kgから2 kg）を、また足首と手首の関節動作制限のためにそれぞれ0.75 kgと1 kgの重りを装着している。つま先が上がりにくい状況を再現するために、靴型のサポーターをはめている。さらに足、膝関節および手、肘関節には、関節固定帯を装着し、動作の制限を加えている。手指は感覚の低下をもたらすためにゴム手袋と布手袋を組み合わせ、さらに手のひら用サポーターを付けて運動制限をしている。

これらを装着した様子が写真に示されている。未装着時の身体の姿勢と装着時の姿勢の変化を比較していただきたい。老人がビンジュースを飲んでいる姿をあまり見かけないが、関節の制限によりビンを傾けることが難しくなり、物理的に難しくなることなどが、写真からも理解される。



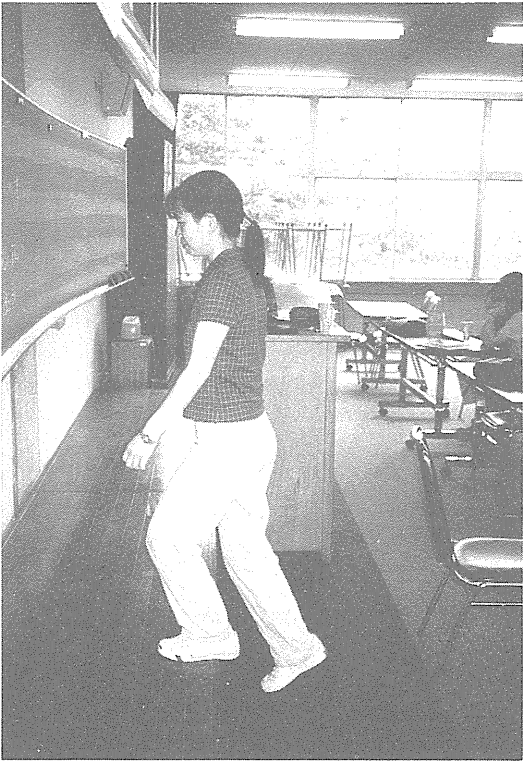
装 着 時



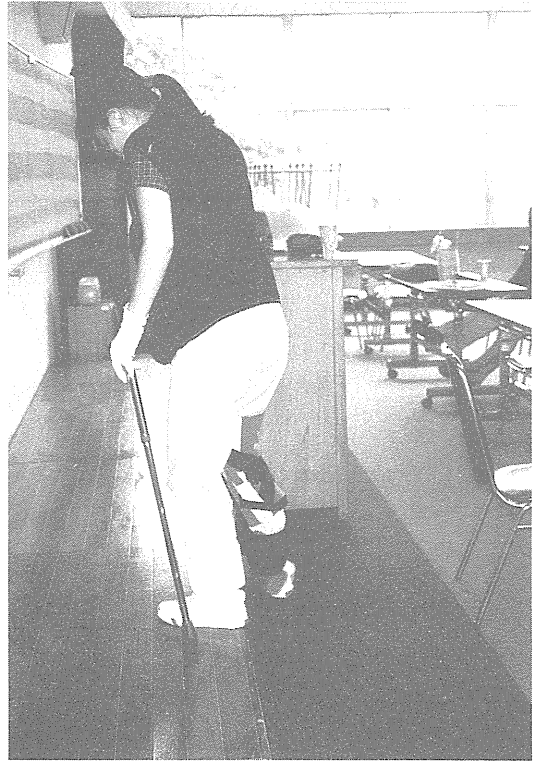
未 装 着 時



装 着 時



未 装 着 時



装 着 時

8. 老人を経験して

これまで想像の世界であった老人を自ら経験することによってどのような変化が生じたのであろうか。実際に装着した体験と、装着している人の動作を見ての主な意見をまとめてみると、

動作に関して：

- ・老人の歩き方について、とぼとぼ（寂しい）としていて大きさにやっているのかと思ったけれど、本当に動けないことが分かった。
- ・ゆっくりな動作にイライラしていたが、自由がきかないことが分かった。
- ・片足だけでも大変だから、両足だともっと大変だろう。
- ・想像以上に自由が利かない。
- ・つかかかってこけそうになったが、老人だと本当にこけていただろう。
- ・若いから力でこなすけれど老人ではどうだろうか。
- ・立つときに声を出すようになった。

感覚世界に関して：

- ・世界が暗く見え、昼か夜か分からない感じになった。老人がひがみっぽくなるのも分かる気がした。
- ・それまで見えていたのが見えにくくなって寂しい感じがした。人に当たりたくなる気持ちも。
- ・視界が暗いと外界にも鈍くなるし、寂しがり屋になるかもしれない。
- ・光や音が遠くなってしまった。
- ・耳が聞こえにくくなったことで、人が遠くになる。寂しくなる。
- ・耳が聞こえなくなると、疎外されて自分がみんなから遠くにいるように感じる。

などの意見がみられた。また、外から見ているだけでも動作の違いに気づいていることが次のような報告から推察される。

- ・見ていて動作がゆっくりとなり、不自由だと思った。
- ・ジュースの飲み方も老人を見るようであった。
- ・支えてあげたいという気持ちが分かる。自分では自立した老人になりたいと思っていたが、身体的にも難しいかもしれない。
- ・首から前を出して飲もうとしている。
- ・老人がなぜゆっくり歩くのかが分かって、自分のイライラが減るかも。
- ・乗り降りの時老人を押し退けていたが、今はそれを待てるかもしれないと思っている。
- ・何度も聞き返す祖母に、自分の部屋に行ってしまった自分だが、祖母の寂しさが分かるような気がした。聞き取りにくいのだ。
- ・着けた人がのろのろ歩いていたのを見て、のろいだけ感じていたが、ギャップがあることに気づいた

- ・自分もなるのかと思うと怖い。
- ・老人に限界がある。自転車で通りすがりに挨拶しても返事が遅かったが、その理由が分かった気がした。
- ・字がきたないが、筋力と関係しているのかと思った。
- ・口うるさいという老人のイメージで自分はそうならないと思っていたが、そうなるかもしれないという気になった

変化の方向は、総じてポジティブな方向へのものであった。最初に疑似K Jで分類されたマイナスイメージの項目への共感的な理解は、多くの表現に見られている。もちろん、これはこれまでの老人の行動についての学習結果とも関係しているのであろうが、外からの動作や姿だけでなく、実際に飲めないという直接経験のもつ意味は大きいと思われる。

9. 全体的討論

これまでの老人と自己の老化についての議論は、学生たちにどのような問題意識をもたらしたのであろうか。授業の最後の数時間において教員と学生の間でディスカッションがなされた。学生たちは、「老人の住んでいる世界（こういう風に見ているのだなあということ）が分かった」「自分の中にあるリズムと違うリズムへの気づきがあった」、「その人一人が年をとっていくわけではない」「若いときの生き方と、老いがきた時の関係性を知ることが必要である」など、装着後の意識変化を積極的に報告したが、それに対し我々（津村・河合）は、「老人の心理的世界が自分たちと異なることを知識がシミュレーションによって自己と結び付けたのだが、老人のことがよく分かって手助けしなければと考えるのは、画一的で分かり過ぎではないか」と問題を投げかけてみた。

これに対して、「老人と若者とわけること自体が問題で、リズムやテンポが違うことに気づくのが必要なのだと思う」とか、「身体がどうであれ、自分がその段階でどう生きているかが問題である」「今ここでどのように生きているのかが大切である」などの意見が出され、単に理解したということではなく、他者の立場に立った視点への気づきがあったのだということや生き方そのものへの問題意識の重要性などが返されてきた。しかし、人によってはさらに深い所での議論がなされている。例えば、「先生、知識があっても愛情がなければ仕方がないのではないのでしょうか。マニュアルがあると、目の前にいる人がマニュアルにある人と同じであると感じてしまう、マニュアル通りの人と思い込んでしまうところに問題があるのではないのでしょうか。マニュアル通りだと『らくちん』だし、問題はすべて相手にかぶせられるから。」、「知識がこんどは、『お年寄り』という見方をつくりだし、上から見る見方になるのではないでしょ

うか。」などの意見が出されている。

自分たちの実際の生活との接点について、「老人との同居も含めて、老化や老後をどのように考えているのか」など、自分たちの展望について、さらに議論を広げてみた。我々の枠組みとしては、老化という「発達現象」についての議論を予測したのであるが、内容はうまくまとまらなかった。以下にその一部を要約的に示しておくが、女性の問題を中心とした本音の議論が出てきているという意味では興味深いものであった。

s : 「本来対等なのは分かるが、実際の生活が入ってくると、人としての見方が崩れるのだと思う。」

s : 「老人の介護の時に初めて老人を移動させたのだが、“痛いはや、へたくそ”と言われ「カー」としてしまった。「クソー」「ムカムカ」してくると思いつながら行動ではうまくやっているんですね。こんなに偽善者ぶっているのかなんて考えながらも、でもやっている。」

s : 「苦しくても現状を受け取ってしまう。老人問題が美談でしか受け取れないからこそ問題なのではないだろうか。本当は、美談でもなくて、単なる自己犠牲なのではないかって。だからこの授業で習ったように、みんな老人になるってことは分かるけれど、それと老人の世話とは少し離れているんですね。」

s : 「本当の悪い所は出ないから、女はその問題から抜けきれない。」

s : 「さっきの老人介護も、自分が苦勞したのだからあって実感。」

「二面性を持ちながらつき合うことは、実際問題としてどれくらい意味があるのだろうかって・・・。」

T : 「自分の思っていることを正直に伝えながら、共に生きることができるのではないか、また葛藤に直面しながら生きていくことが大切ではないか」

「そして、目の前にいる人とどのような関係をもちたいかの問題にもなるだろう」

s : 「実際になるとそうでないかも」

s : 「うちの父親は四男だけれど、突然、同居したんですね。最初はどちらも頑張っていたが、慣れてくると急に変化した。」

「痴呆状態だから、病気だから仕方がないと考えると腹も立たなくなる。」

T : 「今ここでの自分を客観的に見る。自分で自分の状態を知る。セルフモニタリング (self monitoring) できているかどうか重要だよ。」

s : 「老人介護は、本音でいうと絶対、世間体 (せけんてい) がある。自己満足もあるが、世間体ですよ。」

「だから、ぶつかり合っている家族は、本音でやっている家族かも。意外とうまくいっている家は、偽善者ぶっているのかもしれない。」

T：「きわどい考え方だけどそうかもしれない。二面性の中で生きていることは、否定できないよね。」

S：「これは、私の人生であるという意識を本当にもってゆけるのか。」
「相手を互いにどこまで許せるかが問題かもしれない。」
「私もいつかはそうなるのだから、共感的にわかるか・・・」

S：「今は家族も年寄りと同居していないから、経験はないけれど、将来同居する時にはそれまでの経験が関係するかも。」

「老人のイライラが分かるかも（小さい時から住んでいると）。」
「いきなりの同居はきっと辛いかも。どちらもかまえるかも。」

S：「老人の個性を認めることもよくわかったし、身体が衰えるのも仕方がないし、自分もそのようになることは分かった。」

S：「問題は、その捉え方にあるように思う。老人を世話するのも女性という視点が強調されすぎている。男の人はどう関与するのか見えてこない。」

「年寄りの表現についても、マスコミでは、女性の年寄りには『老女』という表現をする。60歳の老女などとかかかれると、よぼよぼの今にも倒れそうなイメージが浮かんでしまう。男は『老人』で、女は『老女』ということばの使い方は、まあ言えば人権問題ですよ。」

T：「老人問題が介護、しかも女性の（嫁と姑に代表される）問題としてイメージされるところにたしかに問題はあると思う。」

「日本では個人の問題と行政の問題がまだ整理されていないと思う。」

S：「もし自分が歳を取って、人生を振り返った時、そこに何も残っていないで、年齢だけがあったら悲鳴をあげてしまう。」

「女性の問題として見すぎる点が気にかかる・・・」

T：「何も残っていない、という時の中身ってなんなのかな・・・」

「年齢だけが過ぎて、自分って何かははっきりしないってことかな・・・」

S：「結婚後について言うと、苦労という言葉が女性にだけついているように思われる。」

「耐えているとそれが望ましい姿として捉えられる・・・」

T：「歳はみんなに平等に与えられるものだけれど、その意味と過ごし方は人によって違う。(自分にとって意味のある生活でなく、人に見られている演じている姿だけが気になってしまっていることが問題なのじゃないかな・・・)。」

10. 最後に

人間が時間軸に沿って変化するという現象を、老人を対象として、現在の自己との連続の中で捉えようとする試みを行ってきた。この報告書は、授業のまとめと同時に自己点検・評価をかねたものともいえるのであるが、我々の意図を越えて、授業内容が人間の本質的な問題にまで展開していったことは興味深いことであった。女子短期大学であるという点が、老化を単に発達現象の最終過程として位置づけるだけでなく、その裏にある女性問題へと導いたのだと思われる。発達を全面に押しだした授業の中で、机上の論としての発達を越えて、人間理解と自己発見までいたることは、半期の授業としてはかなり難しいことであるが、学生の積極的な参加があった。

人間関係科の多くの授業は、学習者自身の体験を学習の素材として取り上げ、自己理解や他者理解が深まるように工夫しながら、プログラムを展開している。特に、友人関係や家族関係といった日常の関係からは少し離れた世界の人々とのかかわりを体験することを目的とした人間関係実習としての「フィールドワーク」、また集中的な対話を通して自己理解・他者理解・グループ理解を行おうとする「Tグループ合宿」、構造化された実習を用いた体験を通してグループ・プロセスやコミュニケーション・プロセスを学ぶ「人間関係プロセス論」などが、人間関係科の代表的な授業である。これらは、他者と実際にコミュニケーションすることを通して、他者と共に生きる喜びや葛藤を乗り越えながら、他者を理解したり、自分自身の生き方を探っていくのである。

本報告の授業は、他者との対話とか、実際に他者と関わる体験とは異なり、疑似体験ではあるが、まさに他者になってみること、他者の内側に入って、その人自身からその人自身を理解することに挑戦した授業である。それは、他者と関わることによる喜びや苦しみといった体験は伴わないものの、老人といった一見掛け離れた他者をより身近な存在として了解するには興味深い教育の冒険になったのではないだろうか。そして、その成果は、前述の教員と学生による討論の場に出された真剣な意見や、後述の学生のレポートの声に現れている。それらは、本授業の目的であった授業前に抱いていた老人に対する偏った見方や老人との人間関係のあり方をかなり真剣に考え直す契機になっていることは間違いないであろう。また、学生たちにとって老人の問題を考えることによって、今の自分自身の生き方への問いかけが行われるようになったことも大きな収穫ではなからうか。

最初にイメージする言葉を挙げた時は、よぼよぼとかしわしわとか言いたいことをさんざん書いていたが、実際何十年かしたら絶対自分もそうなる。そして、今のお年寄りの人たちも好きでそうなった訳ではなく、自然の成りゆきなのに若い人からさんざんのけ者にされたり、ひどいことを言われたりするところを考えると一言にはいえなくなった。好きでよぼよぼしているわけじゃないのに、何故そんなことを言うのだろうと腹が立ってきて、世間を批判的に見たくなる気持ちも分かる。私たち自身が老人のイメージを、自分たちで作り上げてしまっている気がする。

私は将来自立した老人になりたいと思っていた。趣味をもって人と交わり、食事・洗濯等お嫁さんと同居せず、自分のことは自分でやりたい。又、結婚して姑と同居することになったら、姑にもそうして欲しいと考えていた。でもこれは、今の健康状態、自分の気持ちの上での望みであって、老人の体・気持ちになって考えていなかった。もし、この授業に触れていなかったら、将来自分が老人になってはじめて気づき、ショックを受けていたかも知れない。何十年も先のことを考えるというのはとても難しいと思うし、ほとんどの人は自分が老人になった時のことなど考えていないと思う。

今まで一生懸命仕事や子育てをがんばってきて、やっと自分のやりたいことをできるようになったのだ。今度は暇はあっても体はついてこなくて、余生も短いのにたいして楽しめなくて、鬱っぽくなってだんだん意欲もうすれて、何となく生きていたらぼけてきて、我が強くなって周りにうっとおしがられてよけい孤独になっていく…のかな。自分はそのパターンにはまりたくないなあと思う。自分の親とかがはまりかけてたら、はまらないように考えて行動したり働きかけたい。

この授業の初めの方で、おじいさん・おばあさんと同居するについてどう思うか、という問いかけに対して、私は「別に何とも思わない」と答えた。その後、家の事情で本当におばあちゃんと同居することになった。あれから1ヶ月。家の中ではみんな疲れ果てている。父も母も外出できなくなった。特に母は夜中にろくに熟睡できず、昼間は1分でも目を離せない。私もいつもいつも気を遣って、自分の部屋にいる時間がほとんどなくなった。おばあちゃんはたまに何を考えているのか分からない。いい加減にして。早くおじいさんの家に帰って、と少し思ってしまった自分。でも、好きで動きが鈍くなったんじゃない。好きで分からないふりしているんじゃない。1番辛いのはおばあちゃん。身をもって体験してみて「うっとおしい」なんて思ってしまった私を、心からひどい孫だと思った。

ほとんどの人は自分が老人になった時のことなど考えていないと思う。
実際に老人がどんな気持ちなのか、本当に理解したい。
私たち自身が老人のイメージを、自分たちで作り上げてしまっている気がする。

自分もいつかそういうふうになるのかもしれないと思うと、とても怖いと思う。
自分もいつかそういうふうになるのかもしれないと思うと、とても怖い
自分もいつかそういうふうになるのかもしれないと思うと、
自分もいつかそういうふうになるのかもしれない
自分もいつかそういうふうになる
自分もいつか
自分も

参考文献

- | | |
|----------------|---|
| 大友 英一 編 | 老年 1993年 メディカ出版 |
| 大原 健士郎・岡同 哲雄 編 | 壮年期・老年期の異常心理学
1980年 新曜社 |
| 井上 勝也・長嶋 紀一 編 | 老年心理学 1980年 朝倉出版 |
| 原岡 一馬・河合 優年 編 | 老人問題に関する総合的・実証的研究 報告書
名古屋大学教育学部 1988年 |
| 津村 俊充・山口 真人 編 | 人間関係トレーニング 1992年
ナカニシヤ出版 |
| 服部 万里子 | 高齢者擬似体験「うらしま太郎」
インストラクター養成講座
服部メディカル研究所 |

* 本授業の取り組みに積極的に参加し、本報告に協力してくださった、以下の受講生の皆さんに感謝の意を表します。

受講生：福田真美、林理恵、平松照子、堀田幸江、石田奈奈、岩橋直子、岩瀬貴子、金澤香、加藤真由美、岸野恵子、光岡こずえ、三浦麻美、三浦潤子、中井夏子、野村祐子、岡部留美、佐久間尚美、佐藤知子、佐藤陽子、柴田真由子、杉本若恵、鈴木英子、高木奈穂美、武市しのぶ、谷川佳子、戸塚葉子、土屋輝美、横井正美、吉野加織、湯浅雅子

* 老人介護指導 三重大学医療技術短期大学部 助教授 明石 恵子氏の協力を得ました。